

# 古代地中海世界の追放儀礼に関する一次文献の分類と解説

浅野 淳博

## 導入

パウロは1コリント書4章13節において *περίψημα* と *περικάθαρμα* という語を用いるが、これを古代地中海世界において広く知られていた追放儀礼との関連で解釈する試みがしばしなされる。そしてその際に、9世紀のコンスタンティノーブル大司教フォティオス著『レキシコン』の1節が支持テキストとして引用されがちである。これは、追放儀礼（とくにユダヤ教儀礼の山羊追放）というメタファによってイエスの死（と罪の赦し）を理解するキリスト教神学に少なからず関わる。したがってここでは、パウロの贖罪理解を考え始める手がかりとして、これらの語がいかにより用いられたかを分析する。ここで問題とする議論の中心にフォティオス著『レキシコン』があることから、分析範囲を後9世紀までと限定する。ここで扱う資料は（A）追放儀礼を示唆する語と理解されがちな *περίψημα* が用いられるテキスト、（B）追放儀礼を示唆する語として理解されがちな *κάθαρμα* が用いられるテキスト、（C）追放儀礼を示唆する語として理解されがちな *περικάθαρμα* が用いられるテキストである。本来は追放儀礼とその起源神話に関するテキスト、また *περίψημα* が見られる碑文の分析もこの研究に欠かせないが、紙幅の都合上これらはここで扱わない。

## I. ΠΕΡΙΨΗΜΑ の分析

### A. 導入：枠組みとしてのパウロとフォティオス

#### 1.1 コリント4章12-13節

「私たちは、侮辱されれば祝福を与え、迫害されれば耐え忍び、中傷されれば慰めの言葉をかけます。私たちは世の塵のようになりました。今に至るまですべての人の芥（*peripsema*）となっているのです（*λοιδορούμενοι εὐλογοῦμεν, διωκόμενοι ἀνεχόμεθα, δυσφημούμενοι παρακαλοῦμεν. ὥς περικαθάρματα τοῦ κόσμου ἐγενήθημεν, πάντων περίψημα ἕως ἄρτι*）。」

## 2. フォティオス『レキシコン』 s.v. περίψημα<sup>1</sup>

「peripsema : [1] 断片。[2] 足の下（あるいは履き物の底）にあるもの。[3] 身代金（あるいは「贖い」）。蔓延る厄災を取り除くために毎年海に投げ込まれる若者に対してこのように言った、『われわれの peripsema となれ。』すなわち救いや身代金のことである。ちょうどポセイドンへ犠牲を献げるように海に投げ込んだ（Περίψημα: κατάγμα・ἢ ὑπὸ τὰ ἵχνη・ἢ ἀπολύτρωσις・οὕτως ἐπέλεγον τῶι κατ' ἐνιαυτὸν ἐμβαλλομένῳ τῇι θαλάσσει νεανίαι ἐπὶ ἀπαλλαγῇ τῶν συνεχόντων κακῶν・περίψημα ἡμῶν γενοῦ・ἤτοι σωτηρία καὶ ἀπολύτρωσις・καὶ οὕτως ἐνέβαλον τῇι θαλάσσει, ὥσανει τῶι Ποσειδῶνι θυσίαν ἀποτινύντες）。」

## B. パウロ以前のテキストにおける用法

### 1. トビト記 5 章 19 節

ἀργύριον τῷ ἀργυρίῳ μὴ φθάσαι, ἀλλὰ περίψημα τοῦ παιδίου ἡμῶν γένοιτο.

お金をお金の上に積み上げないで下さい。私たちの子の peripsema となりますように。

ここでは「それが私たちの子との関係においてゴミくずとなりますように（すなわち、私たちのこの命を考えたならばお金などゴミ同然とお考えになりますように）」となろうか。参照：「それほどお金が大切なのですか。息子の命に代えられるものではありません」（新共同訳）'Do not heap money upon money, but let it be a ransom for our child' (NRSV).

### 2. 『イソップの生涯』 G.35 (1-2cCE)<sup>2</sup>

クサントスは奴隷イソップを連れて菜園へ買い物に行く。菜園の管理人はキャベツやらアスパラガスをイソップに渡す。「クサントスは財布を開けて野菜の代金を手渡した。管理人が『先生、これは何のためですか』と問うと、クサントス曰く『野菜の代金だ。』すると管理人は『どういことでしょう。菜園とその収穫物はあなたにとって peripsema なのですか（καὶ ὁ κῆπος καὶ ἡ φυτεία, περίψιμά σοι ποίει）。』と言う。」

## C. パウロ以降のテキストにおける用法

### 1. 1 コリント 4 章 12-13 節の引用あるいは参照

#### a. 追放儀礼との関連

### オリゲネス『ヨハネ福音書注解』6 章 55 章 (2-3cCE)

「私たちは殉教者に関する事柄について、また疫病のために死ぬ人たちに関する逸話

1 R. Porson, Φωτίου τοῦ πατριάρχου λέξεων συναγωγή (Cambridge: CUP, 1822).

2 B. E. Perry, *Aesopica* (vol. 1.; Urbana: University of Illinois Press, 1952).

について (τῷ ὑπὲρ τῶν τεθνηκότων διὰ λοιμικὰ καταστήματα διηγῆματι) 十分に考えました。なぜなら (わたしたちはそれによって) 至高の方を屠殺者へと導かれる羊、あるいは剪定する者の前でおし黙る仔羊のように理解するからです。これがギリシャ人によるまやかしのない話しならば、また殉教者に関して語ったことが正しければ、(それゆえに) 使徒たちも『世の perikatharma となりすべての者の peripsema です』と言われるのであり (περικαθαράτων τοῦ κόσμου γινομένων, καὶ πάντων περίψημα λεγομένων διὰ ταῦτα τῶν ἀποστόλων)、それならば、犠牲となった神の仔羊はどれほど優れた方でしょうか。この方はわずかの人たちではなく全世界の罪を取り除き、そのために苦しまれたのです。』

「疫病のために死ぬ」という表現が追放儀礼を示唆しているようだが、ほんのわずかな言及であり、むしろ περίψημα と犠牲の仔羊が強く結びつけられている。追放儀礼と犠牲が混同あるいは融合されるケースは広く見られる。

## b. キリストの受難との関連

### i. オリゲネス『ヨハネ福音書注解』28 卷 18 章

『神は罪を知らず罪を犯していないこの方を罪としました。それはすべての罪を引き受けるためです。』そしてあえて言うならば、より多くの使徒たちのために世の塵またすべての人の芥となるためです (εἰ δεῖ τολμήσαντα εἰπεῖν, πολλῷ μᾶλλον τῶν ἀποστόλων αὐτοῦ περικάθαρμα αὐτὸν τοῦ κόσμου γεγονέναι καὶ πάντων περίψημα)。彼らが言うとおりで、すなわち『私たちは世の塵のようになりました。今に至るまですべての人の芥となっているのです。』

前半の引用は 2 コリント 5 章 21 節、後半が 1 コリリント 4 章 13 節。現代の注解者のあいだでは、前者が追放儀礼を示唆していると理解される場合がある。パウロの生き様としての「塵芥」がキリストの受難と明確に結びついている。

### ii. その他のテキスト<sup>3</sup>

「私の霊は十字架の περίψημα」(イグナティウス『エフェソ書』18 章 1 節) / 「キリストゆえの愚かさ」という生き方が περίψημα に象徴される (Didymus the Blind, *Fragmenta in Psalmos*, 739.9) (4c.CE, Alexandria) / περίψημα に象徴されるキリストの受難は他者の救いのためである (Chrysostom, *In epistulam i ad Corinthios* vol.61, p. 108 of MPG)。

3 E. Mühlenberg, *Psalmekommentare aus der Ketenenüberlieferung* (2 vols.; Berlin: De Gruyter, 1975-77).

c. 「価値転換の実践」という主題

i. 他者への奉仕／弱者救済

○キュロスのテオドレトス『カンティクム解説 (*Canticum*)』MPG, vol.81, p.208 (4-5cCE)

「使徒たちは、『侮辱されれば祝福を与え、罵倒されれば慰めの言葉をかけ (βλασφημούμενοι παρεκάλουν)、また世の塵となりました。』また彼らが言うには『今に至るまですべての人の塵 (κάθαρμα) となっているのです。』ああ小さい姉妹よ、幼き娘よ、このことが書かれている時代を生きる私たちは、姉妹に何をすべきでしょうか…。」

異本には *δυσφημούμενοι* を *βλασφημούμενοι* と、*περικάθαρμα* を *κάθαρμα* とするものがあり、ここではそれが反映されている。

○その他のテキスト<sup>4</sup>

富者から蔑まれる貧者を受容する根拠としての *περίψημα* (Theodoretus, *Interpretation in xiv epistulas sancti Pauli* MPG, vol.82, p.257) / キリスト者が *περίψημα* になったのは苦難の中にある者のため (*Catenae (NT) in epistulam i ad Corinthios* p.227) (4-5cCE) / 分け隔てのない奉仕の象徴としての *περίψημα* (Cyrillus, *Commentarii in Lucam* p.94) (4-5cCE, Alexandria)

ii. 謙遜の勧め

○アンティオコス・モナコス『聖典総覧 (*Pandectae*)』MPG, vol.89, hom.70 (7cCE, Ancyra)

「聖なるパウロは私たちの考えを整えて手紙にしたためて教えています。『私はなんと哀れな者でしょう、だれがこの罪の体から私を救ってくれるでしょう。』あるいはまた『私たちは世の塵となり、すべての人の芥となっています。』これらの言葉は謙遜の模範です (ταῦτα δὲ τὰ ῥήματα ταπεινοφροσύνης ὑπόδειγμα)。」

○その他のテキスト<sup>5</sup>

*περίψημα* (=キリストの奴隷) は立場の弱い者のさらに下に身を置くべき (Basil the Great, *Homiliae super Psalmos* MPG, vol.29, p.381) (4cCE, Caesaria) / すべての人を受け入れる根拠としての *περίψημα* という立場 (Ephraem Syrus, *Sermo de virtutibus et vitiis* sec.4) (4cCE, Syrus) / 傲慢の誘惑に対処するために *περίψημα* という立場を認

4 J. A. Cramer, *Catenae Graecorum patrum in Novum Testamentum* (vol. 5; Oxford: OUP, 1841); J. Sickenberger, *Fragmente der Homilien des Cyrill von Alexandrien zum Lukasevangelium* (Leipzig: Hinrichs, 1909).

5 K. G. Phrantzoles, *Sancti patris nostri Ephraem Syri opera omnia* (vol. 1. To Perivoli tis Panagias, 1988).

識すべき (Joannes Damascenus, *De octo spiritibus nequitiae* MPG vol.95, p.81) (7-8cCE)

### iii. 愛敵

#### ○アンティオコス・モナコス『聖典総覧』MPG vol.89, hom. 40

「私たちはパウロとともにパウロの言葉を歌うのです (τὰ τοῦ Παύλου, σὺν τῷ Παύλῳ μελωδήσωμεν)。『侮辱されれば祝福を与え、迫害されれば耐え忍び、罵倒されれば慰めの言葉をかけます。私たちは世の塵のようになりました。今に至るまですべての人の芥となっているのです。』私たちはキリストの敵であるユダヤ人たちを裁きはしません…。」

これは 1 コリント 4 章 12-13 節が賛美歌としてうたわれたということか？フィリピ 2 章のケノーシス賛歌でさえ初代教会において歌われたという証拠がないことを考えると、これは注目に値する。

#### ○その他のテキスト<sup>6</sup>

περίψημα として甘んずるのは迫害者の末路を知って憐れむから (Maximus Confessor, *Liber asceticus* section 15) (6-7cCE, Constantinople)

### iv. その他の価値転換主題

#### ○ペトロス『歴史 (Historia)』p.59 (9cCE, Sicily)<sup>7</sup>

「ああ三重に不幸な者よ、すべての不法があなたのうちに満ちています。もしあなたが言うようにあなたがパウロの弟子ならば、なぜその教えに倣わないのですか。パウロはいいます。『peripsema』、『月足らずで生まれたもの (ἐκτρωμα)』、『もっとも小さき使徒 (ἐλάχιστον τῶν ἀποστόλων)。』あなたは悪を極め、虚偽を誇り、なんの善もなしていません。」

ἐκτρωμα (1 コリ 15.8) と περίψημα が並列に置かれることがしばしばある。

#### ○その他のテキスト<sup>8</sup>

ヨブの義なる苦悩と περίψημα が結びつく (Origen, *Homiliae in Job* MPG, vol.17, p.69) / 死に至る行いでなく命にいたる行いを選ぶ動機としての περίψημα というあり方

6 R. Cantarella, *S. Massimo Confessore. La mistagogia ed altri scritti* (Florence: Testi Cristiani, 1931).

7 Petrus, *Historia utilis et refutation Manichaeorum vel Paulicianorum*: D. Papachryssanthou, "Les sources grecques pour l'histoire des Pauliciens d'Asie Mineure I. Pierre de Sicile. Histoire des Pauliciens," *Travaux et mémoires* 4 (1970): pp.7-67.

8 P.R. Coleman-Norton, *Palladii dialogus de vita S. Joanni Chrysostomi* (CUP, 1928); P.E. Pusey, *Sancti patris nostri Cyrilli archiepiscopi Alexandrini in D. Joannis evangelium* (3 vols.; OUP, 1872); H. Usener, *Sonderbare Heilige I. Der heilige Tychon* (Leipzig: Teubner, 1907); J. Cozza-Luzi, *Nova Patrum Bibliotheca* (9/2 Rome: Bibliotheca Vaticana et Typi Vaticani, 1888-1905).

(Palladius, *Dialogus de vita Joannis Chrysostomi* p.136) (4-5cCE, Helenspolitanis) / この世の栄光ではないものの追求の動機としての περίψημα というあり方 (Cyrillus Alexandrinus, *Commentarii in Joannem* vol.2, p.597) (4-5cCE, Alexandria) / περίψημα という生き方が人を迷いから引き戻す (Joannes Ellemosynarius, *Vita Tychonis*, Manuscript p.6) (6-7cCE, Alexandria) / 生まれたパウロに倣う生き方としての περίψημα (= ἔκτρωμα) (Theodorus Studites, *Sermones Catecheseos Magnae* 53, p.144) (8-9cCE, Constantinople) / περίψημα という生き方が奢る者を辱める (Chrysostom, *1 ad Corinthios* MPG, vol.61, p.109)

#### d. その他

##### i. キリスト者の苦しみとしての ΠΕΡΙΨΗΜΑ

###### ○モプスエスティアのテオドロス『1 コリント書断片』 p.177 (4-5cCE)<sup>9</sup>

「メタファとしての peripsema は、食後に食卓を拭くこと、また不用な滓（かす）を取り除くことを指すのに用いられます (Τὸ περίψημα ἐκ μεταφορᾶς εἴρηται τῶν τὰς τραπέζας μετὰ τὸν τοῦ φαγεῖν καιρὸν ἀποψώντων καὶ ἀπορριπτούντων ὡς περιττὰ ψήγματα)。キリストゆえに辱めを受ける私たちはすべての人の拭き取られた滓また拭き布であり、安物で理不尽に蔑まれる対象なのです (ἐσμὲν πάντων ἀπόψημα καὶ ἀπόμαγμα, εὐτέλεια καὶ περιύβρισμα)。」

###### ○セウエリアヌス『1 コリント書断片』 p.241 (4cCE, Constantinople)<sup>10</sup>

「私たちはキリストのゆえにすべての人のための排泄物となっています。労働者の汗やよごれを拭き取る麻布が peripsema と言われます (περίψημα δὲ λέγεται τὸ σάβανον ὃ τοὺς ἰδρώτας τοῦ κάμνοντος ἀποψήχει καὶ ἀπομάσσεται τὴν κάκωσιν τὴν ἐπικειμένην)。」

περίψημα が何かを説明しようとするが、著者はその際に追放儀礼を持ち出すことを思いつかなかったようだ。

###### ○その他のテキスト<sup>11</sup>

キリスト者の苦境を示す περίψημα (Theodorus Studites, *Epistulae* Ep.381) / 同 (Ignatius Diaconus, *Epistulae* Ep.57) (8-9cCE, Constantinople)

9 Theodorus Mopsuestenus, *Fragmenta in epistulam i ad Corinthios*: K. Staab, *Pauluskommentar aus der griechischen Kirche aus Katenenhandschriften gesammelt* (Münster: Aschendorff, 1933).

10 Severianus, *Fragmenta in epistulam i ad Corinthios*: K. Staab, *Pauluskommentar aus der griechischen Kirche aus Katenenhandschriften gesammelt* (Münster: Aschendorff, 1933).

11 Theo. Stud.: G. Fatouros, *Theodori Studitae Epistulae* (vol. 1-2 Berlin: De Gruyter, 1992); Ign. Dia.: Efthymiadis & Mango, *The Correspondence of Ignatios the Deacon* (Dumbarton Oaks, 1997).

とくに Ign. Dia. に関しては、1 コリント 4 章 13 節を解説するのではなく本来的な意味で περίψημα を用いる場合に περίψημα καὶ περικάθαρμα と 2 語を並列させており、これらの語が 1 コリ 4.13 と強く結びついていることを伺わせる。

## ii. その他のテキスト<sup>12</sup>

「すべての人の芥」の「すべて」の応用範囲の解説 (Joannes Damascenus, *Commentarii in epistulas Pauli* MPG, vol.95, col.604) (7-8cCE, Damascus) / 解説のない引用 (Chrysostom, *I ad Corinthios* MPG, vol.61, p.115)

## 2. 「僕／奉仕者」としての ΠΕΡΙΨΗΜΑ

### a. 『バルナバ書』4 章 9 節 (1-2cCE)

「教師のようにではなく、持てるすべてを残さず示さねば気が済まない者として、多くのことを書きたいとは思いますが、先に進まねばなりません。あなたの peripsema (περίψημα ὑμῶν)。」

### b. 『バルナバ書』6 章 5 節

「あなたがたが理解できるよう非常に明快に書いております。私はあなたがたのための愛の peripsema です (ἐγὼ περίψημα τῆς ἀγάπης ὑμῶν)。」

### c. イグナティウス『エフェソ書』8 章 1 節 (偽イグナティウス『処女マリア』8 章 1 節参照)

「わたしはあなたがたの peripsema、あなたがたエフェソの人たちのためにおのれを聖別します (περίψημα ὑμῶν καὶ ἀγίζομαι ὑμῶν Ἐφεσίων)。」

Lightfoot は「your lowliest servant」と訳すが、Holmes は「a humble sacrifice for you」としている。後者に関しては、περίψημα を犠牲と混同する当時の傾向を念頭においているのならば許容されるが、厳密には περίψημα と sacrifice は結びつかない。あるいは Holmes はイグナティウスの殉教願望をここに読み込んでいるのだろうか。

12 Theo. Stud.: G. Fatouros, *Theodori Studitae Epistulae* (vol. 1-2 Berlin: De Gruyter, 1992); Ign. Dia.: Efthymiadis & Mango, *The Correspondence of Ignatios the Deacon* (Dumbarton Oaks, 1997). またこの項には、キリスト者の迫害体験の象徴としての περίψημα (Augustin, *Exposition on Ps. 89*) も含まれよう。

d. エウセビオス『教会史』7巻22章7-8節(4cCE, Caesarea)

デュオニシオスの著作に依拠しつつ、エジプトのキリスト者がいかに病人の看病のために命の危険をも顧みず喜んで仕えたかその様子を記す。「病人の看病をして彼らを力づけた多くの者が、彼らの死を自らに移したために死んでしまいました。一般に友好の意を示すだけの言い回しをじつにその行いにおいて現実のものとし、彼らの peripsema を取り除いたのです (τὸν ἐκεῖνων θάνατον εἰς ἑαυτοὺς μεταστησάμενοι καὶ τὸ δημῶδες ῥῆμα, μόνης αἰδοῦν φιλοφροσύνης ἔχουσιν, ἔργῳ δὲ τότε πληροῦντες, ἀπὸντες αὐτῶν περίψημα)。じつに私たちの内で卓越した人たち、つまり長老、執事、その他非常に評判のよい人たちが、このようにして世を去った。このような形の死は、大いなる敬神と確固とした信仰であり、なんら殉教に劣らないと思われるのです (μηδὲν ἀποδεῖν μαρτυρίου δοκεῖν)。」

「あなたの僕 (peripsema)」という言い回しが、死に至る病という忌み嫌われる περίψημα をその身に受けて死んで取り除くという行為によって、内実のある僕の働きをした、ということであろうか。この点に関して、ウァレリウス (17c) は以下のように注解している。

「パウロ書簡に見られる περίψημα という表現は、アレクサンドリアで一般的な表現として用いられたようだ。挨拶において互いに仕えあうことを示すときに ἐγὼ εἰμὶ περίψημα σου と述べたが、これがここでデュオニシオスが想定した状況かも知れない。一方でより確からしい可能性として、キリスト者が異邦人たちから πάντων περίψημα と呼ばれていたことが考えられる。これはすなわち、つまらないゴミ滓、である。この解釈の方がよい (Christianos vulgò à Gentilibus vocatos fuisse hoc nomine, πάντων περίψημα, id est purgamenta faeculi: quod magis placet) <sup>13</sup>。」

ここでは περίψημα と殉教が結びつけられるが、たとえばイグナティウスが περίψημα を用いる場合に、そこには「殉教者としての περίψημα という僕/という考えがあっただろうか。いずれにしてもそのような関連を明記してはいない。

e. バルサヌフィウスとヨハネ『書簡』205 (6cCE, Gaza)<sup>14</sup>

「もし好機会があなたに訪れるならば、私はそれを阻んであなたの利益を取り去ろうなどとはいたしません。私はあなたの邪魔をするどころか、むしろあなたの peripsema であって、来たるべきことのためにあなたのために祈りお支えします

13 Evsebio Pamphili, *Ecclesiasticae historiae* (ed. Henricus Valesius; Parisiis, 1659).

14 Barsanuphius et Joannes, *Quaestiones et responsiones: Angelis-Noah & Neyt, Barsanuphe et Jean de Gaza, Correspondance, tome I-II* (Éditions du Cerf, 1997-98).



(ἀλλὰ καὶ περίψημά εἰμι τῶν ἐρχομένων ὑπερέξασθαί σου καὶ ὠφελῆσαι)。」

ここでの περίψημά は処分の対象となる者という謙遜した奉仕者の姿勢か？これは /I am at your disposal/ という英語表現に近似していると思われる。

### 3. その他

#### a. 十字架と ΠΕΡΙΨΗΜΑ

##### イグナティウス『エフェソ書』18章1節

「私の霊は十字架の peripsema です。それは不信心な者にとっては躓きであっても、私たちににとっては救いであり永久の命です (περίψημα τὸ ἐμὸν πνεῦμα τοῦ σταυροῦ, ὃ ἐστὶν σκάνδαλον τοῖς ἀπιστοῦσιν, ἡμῖν δὲ σωτηρία καὶ ζωὴ αἰώιος)。賢いものはどこでしょう。議論好きはどこでしょう。思慮深いと言われる者の誇りはどこでしょう。」

「磔刑で死んで破棄されるべき忌まわしいもの」ほどの意味か。1 コリント 4 章 13 節の文脈に倣って、「賢さ・愚かさ」の価値転換が語られている。

#### b. 捨て去られるゴミとしての ΠΕΡΙΨΗΜΑ

##### i. ヘシキオス『レキシコン』s.v. περίψημα (5-6cCE, Alexandria) <sup>15</sup>

「peripsema: 拭い取られたもの、身代金、身代わりの命 [、あるいは履き物の下にあるすべてのもの] (περίψημα: περικατάμαγμα, ἀντίλυτρα, ἀντίψηχα [ἢ ὑπὸ τὰ ἵχνη πάντων])。』

おそらく ἀντίλυτρα と ἀντίψηχα は *Glossae Sacrae* であり、8cCE 辺りのビザンティン神学の影響を受けている可能性も看過できない。

##### ii. イグナティウス・ディアコヌス『書簡』58 (8-9cCE, Nicaea) <sup>16</sup>

「もし謙遜に包まれてもたらされた誰かの要望に耳を傾けないとしても、彼は（それを）perikatharma や peripsema や呆れかえる廃棄物のように考えたことだろう (ὥς περικάθαρμα καὶ περίψημα καὶ βδελυκτὸν ἀποτρόπαιον ἡγῆται)。」

ここで περίψημα (また περικάθαρμα) が往々にして「魔除け」を意味する ἀποτρόπαιος と併用されていることから、περίψημα から魔除けの効果や儀式が連想されることが前提となっているようにも考えられるが、この文脈ではむしろ ἀποτρόπαιος を「取り除かれる物」という意味での περίψημα の同義語と考えるべきではないだろうか。

15 M. Schmidt, *Hesychii Alexandrini lexicon* (Amsterdam: Hakkert, 1965).

16 S. Efthymiadis & C.A. Mango, *The Correspondence of Ignatius the Deacon* (Dumbarton Oaks, 1997).

c. その他のテキスト<sup>17</sup>

「幸いなるかな、自らをすべての人の peripsema と見なす者よ」(Evagrius, *De oratione* MPG, vol.79, p.1193) / 苦しみの体験としての περίψημα (*Catenae [in NT] in epistulam i ad Corinthos*, p.462)

D. フォティオスの ΠΕΡΙΨΗΜΑ 解釈

フォティオス『書簡』256<sup>18</sup>

「peripsema は、明確に価値のない物あるいは足の下に横たわる物を指し示すが、おそらく身代金（贖い）の方がこの語の意味により近いであろう（ἐγγύτερον δ' ἂν εἴη τῆς σημασίας ἢ ἀπολύτρωσις）。つまり人々のために献げられる犠牲のことである（καὶ τὸ οἶον ὑπὲρ τινων ἱερεῖον προθύμενον）。したがって peripsema はこの概念を指して呼ぶのだが、それ以上にこの古代語は不名誉な者（犯罪者）を指し、この名によって引き渡される。天的な怒りが降りかかり試練が起こる時は、人々は血による代償の必要を認識し（ποινας αὐτοὺς τῶν τετολμημένων ἀπαιτεῖσθαι συνήσθοντο）、直ちに同胞の一人を取り囲む。この者はそのような定めにあるか、クジによって選ばれたか、あるいは自分の意志によってかで、すべての人のために犠牲として献げられ、彼らの浄めとなる（ὅς ἐμελλεν ἢ κλήρῳ ἀφορισθεὶς ἢ τῷ προθύμῳ τῆς γνώμης ἐκούσιος ὑπὲρ πάντων προθύεσθαι καὶ καθάρισον αὐτῶν γίνεσθαι）。彼らはこの者を手で触れて拭き、『我々の peripsema となるように』と願って言った（ὑπομειλισσόμενοι 'περίψημα ἡμῶν' ἔλεγον 'γενοῦ'）。これを受けて、偉大な知恵を備えたパウロは…コリント人たちに『すべての人の peripsema となった』と書いた。すべての人の『peripsema』のようになることで、パウロはすべての人のために痛み、苦しみに耐え、激しく拷問された。私は彼のこの声と同様の他の表現を見出す。すなわち『私は日々死にます、じつにこれが私の誇りです（1 コリ 15.31）。』いかにして彼がすべての人の浄め、犠牲、peripsema であるか分かるでしょうか（ὁρᾷς ὅπως ἦν πάντων καθάρισον καὶ ἱερεῖον καὶ περίψημα;）。彼は内外の無数の事柄に燃やされ苦しめられましたが、それはユダヤ人のためのみならず、ギリシャ人や異邦人や知恵のない者たちのためなのでした。彼が声を上げて叫んだように『なんとかして幾人かでも救うのです（ロマ 11.14?）』 …。」

17 また、この世の栄光こそがかえって περίψημα (Jerome, *Letter to Eustochium* Letter 22) もここに含まれるか。

18 Laourdas & Westerink, *Photii patriarchae Constantinopolitani Epistulae et Amphilochia* (Leipzig: Teubner, 1983-88).

## II. ΠΕΡΙΚΑΘΑΡΜΑ の分析

### A. パウロ以前また同時代の用法

#### 1. 箴言 21 章 17-18 節 : kō·p̄er の訳

MT: :ʾiš maḥ·sō·wr ʾō·hēḇ śim·ḥāh ʾō·hēḇ ya·yin- wā·še·men, lō ya·ʾā·šîr.  
kō·p̄er laṣ·ṣad·dîq rā·šāʾwə·tā·ḥat̄ yə·šā·rîm bō·w·gêḏ.

快樂を好む者は貧しく、ぶどう酒と油を好む者は富まない。邪惡な者は義なる者の身代金、惡なる者は正しい者の代わり。

LXX: ἀνὴρ ἐνδεὴς ἀγαπᾷ εὐφροσυνην φιλῶν οἶνον καὶ ἔλαιον εἰς πλοῦτον· περικάθαρμα δὲ δικαίου ἄνομος (ぶどう酒と油を好んで快樂を愛する者は豊かさに欠ける、不法な者は義人の perikatharma だ)。

*kō·p̄er* が περικάθαρμα と訳される論理展開を考える際に、III.C.2において後述する「三叉路に置かれる κάθαρμα」(ハルポクラティオン『アッティカ十大弁論家辞典』)が示唆を与えるかも知れない。すなわち、磔に用いられた木(それは汚れた κάθαρμα)がヘカテ神へのなだめの献げ物である。

#### 2. 廃棄すべき価値のない物、考え、人

##### a. エピクテートス『人生談義』3.22.78 (1-2cCE)<sup>19</sup>

「50 人の perikatharma を生んだプリアヌス、あるいはダナオスやアエオロスは、ホメロスよりも共同体に貢献したのだろうか (Ομήρου πλείονα τῇ κοινωνίᾳ συνεβάλετο Πρίαμος ὁ πεντήκοντα γεννήσας περικαθάρματα ἢ Δαναὸς ἢ Αἴολος;)。」

ここは「50 人ものろくでなしの息子たち」ほどの意味か？

##### b. その他のテキスト

*Vitae Aesopi* Vita G 14, 31; Appollonius, *Lexicon Homericum* 109.

### B. パウロ以降の用法

#### 1. パウロの引用あるいは参照

##### a. ΠΕΡΙΨΗΜΑ との併用

Origenes, *Commentarii in evangelium Joannis* 6.55.284, 28.18.161; Basilus Caesariensis, *Homiliae super Psalmos* 29.381 (MPG); Didymus Caecus, *Fragmenta in Psalmos* fr. 739 (Mühlenberg); Joannes Chrysostomus, *In epistulam i ad Corinthios* 61.108 (MPG); Palladius, *Dialogus de vita Joannis Chrysostomi* 136 (Coleman-Norton); Theodoretus, *Explanatio in*

19 Epictetus, *Dissertationes ab Arriano digestae*: H. Schenkl, *Epicteti dissertationes ab Arriano digestae* (Leipzig: Teubner, 1916). エピクテートス『人生談義 (上・下)』鹿野治助訳、岩波書店、1992 年。

*Canticum canticorum* 81.208 (MPG), *Interpretatio in xiv epistulas sancti Pauli* 82.257 (MPG); Cyrillus Alexandrinus, *Commentarii in Joannem*, 2.596 (Pusey), *Commentarii in Lucam* p.94 (Sickenberger); *Catena in epistulam i ad Corinthios*, pp.82, 83 (Cramer); Joannes Ellemosynarius, *Vita Tychonis* p.5 (Usener); Antiochus Monachus, *Pandecta scripturae sacrae* homily 70 (MPG); Theodorus Studites, *Epistulae* 381 (Fatouros); Photius, *Epistulae* 165, 256 (Laourdas & Westerink).

## b. それ以外の用法

### i. キリスト者が抱くべき苦難に対する姿勢

Clemens Alexandrinus, *Stromata* 4.7.51 (Frühtel); Eusebius, *Praeparatio evangelica* 12.10.7 (Mras); Ephraem Syrus, *Institutio ad monachos* p.353 (Phrantzoles); Joannes Chrysostomus, *In sanctum Paulum apostolum* p.429 (Jugie et al.); Joannes Damascenus, *Commentarii in epistulas Pauli* 95.604 (MPG); Ignatius Diaconus, *Epistulae* 57 (Efthymiadis & Mango).

### ii. パウロの模範に倣うことの勧め

Joannes Chrysostomus, *In Acta apostolorum* 60.74, *In epistulam ad Hebraeos* 63.197 (MPG).

## 2. その他の用法（破棄すべき物）

『カテナエ』 p.478 (5cCE)<sup>20</sup>

「セウエリアヌス：『ゴミ』の代わりとしての『perikatharma』、また掃き去られた物として（περικάθαρμα ἀντὶ τοῦ ἀποψήγματα καὶ ὥσπερ ἀποσαρώματα）。」

## III. ΚΑΘΑΡΜΑ の分析

Κάθαρμα は幾つかの異本において περικάθαρμα の代わりに用いられているので、下記のとおり教父たちの幾人かは 1 コリント 4 章 13 節を引用する際にこの語を用いている。しかしこの語はパウロの影響下でない用法が多いので、περίψημα や περικάθαρμα とは異なる分類によって分析する。

### A. 語源にもっとも近いと思われる用法

洗淨（浄め）を意味する καθαρίζω, κάθαρις, καθαρός と語根を共有する。一般に洗淨行為の結果として生ずる廃棄すべき部分を指す。したがってそれは汚かったり、不用であったりする。

20 *Catena (Supplementum et varietas lectionis ad epistulam i ad Corinthios)*: J. A. Cramer, *Catena Graecorum patrum in Novum Testamentum* (vol. 5; OUP, 1841).

# 1. 廃棄物

## a. ゴミ、滓

### i. アウリウス・ヘロディアヌス『詩形論 (ΠΡΟΣΩΔΙΑ)』part 3, vol.1, p. 295 (2cCE)<sup>21</sup>

アルカディア地方のアゼニアの泉に言及しつつ、「彼（エウドクソス）はプロイティデスの門を浄めて、カサルマを廃棄した（ὅτε τὰς Προιτίδας ἐκάθαιρεν, ἐμβαλεῖν τὰ καθάρματα）。」

### ii. エローティアース『ヒポクラテス語彙集』p.93 (1cCE)<sup>22</sup>

「ルマタ = katharma (λύματα・καθάρματα)」

「落とされた泥」等を意味する λύματα と同義語ということで、これは上述のハルポクラシオンやフォティオスによる περίψημα の定義に近い。

### iii. その他のテキスト

Eupolis, *Fragment* (Kock), fr.117; Dio Chrysostomus, *Orationes* 12.43; Diogenianus, *Paroemiae* 6.7; Pausanias *Perieg, Graeciae descriptio* 8.41.2; Julius Pollux, *Onomasticon* 2.231, 10.28; Claudius Aelianus, *Fragmenta* fr.39; Pausanias *Attic., Ἀττικῶν ὀνομάτων συναγωγή* λ 11; Synesius, *Epistulae* 4, 79, 32; Orion, *Etymologicum* κ 85, λ 91; Orus, *Vocum Atticarum collection* fr.144; Hesychius, *Lexicon A-O*, α 8114, ε 3375, ι 770, κ 1986, 2479, 3361 λ 690, 1406; Photios, *Lexicon E-Ω*, ς 496, φ 639.

## b. 細かい破片、金属屑

### i. ストラボン『地誌』3.2.8 (1cBCE-1cCE)

錬金術の話をしつつ、「金を収斂剤となる土で精錬・精製するときの katharma が『エレクトロス (alloy)』である（ἐκ δὲ τοῦ χρυσοῦ ἐψομένου καὶ καθαιρομένου στυπτηριώσει τινὶ γῇ τὸ κάθαρον ἤλεκτρον εἶναι）。」

### ii. その他のテキスト

Aristoteles (*Corpus Aristotelicum*), *Fragmenta varia* 6.37.261; Julius Pollux, *Onomasticon* 7.99.

21 Aelius Herodianus, *De prosodia catholica*: A. Lentz, *Grammatici Graeci* (vol. 3.1; Leipzig: Teubner, 1867).

22 Erotianus, *Vocum Hippocraticarum collectio*: E. Nachmanson, *Erotiani vocum Hippocraticarum collectio cum fragmentis* (Göteborg: Eranos, 1918).

## 2. 身体に関する用法

### a. 病原、症状

#### i. ヒッポクラテス『流行病』5.1.2 (5-4cBCE)<sup>23</sup>

「エリス地方でティモクラテースが飲み過ぎた。病気で正気を失ったので薬を飲むと katharma、炎症、悪い病が著しく浄められた (ἐπιει το φάρμακον· οὕτως ἐκαθάρθη τὸ κάθαρμα πούλὺ, φλέγμα τε καὶ χολήν)。」

#### ii. その他のテキスト

Hippocrates, *De morbis popularibus* 5.1.43; Hesychius, *Lexicon* (A-O) λ 1410.

### b. 吐瀉物？

#### ヒッポクラテス『流行病』5.1.18

「彼は薬（毒？）によって潰瘍を患い、それが長いあいだに悪化して血便が生じた。病とめまいが起こり、五杯分の katharma が出た (ἐγίνετο καὸ ἡ ἀσθένεια καὶ ἡ ἄση· καὶ τοῦ καθάρματος ἦσαν πέντε κοτύλαι)。胃の不調によって、腹から多くの水分が出た。」

### c. 糞便

#### 著者不詳『Συναγωγή λέξεων χρησίμων』λ 165 (8-9cCE)<sup>24</sup>

「リュマタ：katharma、すなわち腹からトイレに流し出すもの (λύματα· καθάρματα, αἱ τῆς γαστροῦ εἰς ἀφροδρωῶνας ἐκκρίσεις)。」

## 3. 汚れを除く行為

### a. 浄め

#### i. エウリピデス『ヘラクレス』225 (5cBCE)<sup>25</sup>

「彼女（ヘラ）は、彼（ヘラクレス）が海と陸とを浄める労苦に報いるために (ποντίων καθαρμάτων χέρσου τ' ἀμοιβὰς ὦν ἐμόχθησας χάριν)、火と剣を持って臨むべきであった。」

Καθαρίζω という語には、「浄めによって取り除く」というニュアンスがある。

23 Hippocrates (Corpus Hippocraticum), *De morbis popularibus* (=Epidemiae): É. Littré, *Oeuvres complètes d'Hippocrate* (vols. 5; Paris: Baillière, 1846).

24 I.C. Cunningham, *Συναγωγή λέξεων χρησίμων* (SGLG 10; Berlin & New York: De Gruyter, 2003).

25 J. Diggle, *Euripidis fabulae* (vol. 2; Oxford: Clarendon Press, 1981). エウリーピデース『ギリシア悲劇全集(5)』岩波書店、1990年。

## ii. その他のテキスト

Hesychius, *Lexicon* (A-O) α 8738; Timaeus, *Lexicon Platonicum* q 1001b, cf. Ammonius, Περί ὁμοίων καὶ διαφόρων λέξεων 258.

## B. 輕蔑語

## 1. 人に関するもの

## a. より一般的な輕蔑語

i. デモステネス『メディアス弾劾』185 (4cBC)<sup>26</sup>

「他の者は恥知らずで非常に尊大で、彼らを貧乏人、katharma、人でなしと見なした (ἄλλος οὐτοσί τις ἀναιδής καὶ πολλοὺς ὑβρίζων, καὶ τοῦ μὲν πτωχοῦς, τοὺς δὲ καθάρματα, τοὺς δ' οὐδ' ἀνθρώπους ὑπολαμβάνων)。」

なお、ここでの「人でなし」は冷血漢という意味ではなく、人としての価値がないという意味であろう (cf. Dem., Midiam 198)。七十人訳詩編 21 編 7 節 (22 編 7 節) をも参照。

## ii. その他のテキスト

Euripides, *Iphigenia Taurica* 1316; Demosthenes, *De falsa legatione* 198; Aeschines, *In Ctesiphontem* 211; Dinarchus, *In Demosthenem* 16; Apollonius Rhodius, *Fragmenta* fr.13; Philo Judaeus, *De vita Mosis* 1.30, *De virtutibus* 174; Flavius Josephus, *De bello Judaico* 4.241; Plutarchus, *Sulla* 33.2; Dio Chrysostomus, *Orationes* 7.30, 32.50; Lucianus, *Demonax* 30, *Symposium* 40, *Cataplus* 16, *Juppiter tragoedus* 52, *Charon sive contemplantes* 10, *Deparaso sive artem esse parasiticam* 42, *De mercede confuctis potentium familiaribus* 24, *Hermotimus* 81, *Dialogi mortuorum* 3.1; Julius Pollux, *Onomasticon* 3.66; Cleomedes, *Caelestia* 2.1; Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum* 6.32; Flavius Claudius Julianus, *Εἰς τοὺς ἀπαιδεύτους κύνας* 15; Libanius, *Orationes* 1-64 1.169, 2.56; Synesius, *Epistulae* 148; Joannes Chrysostomus, *In Acta apostolorum (homiliae 1-55)* 60.190 (MPG), *In Matthaeum (homiliae 1-90)* 57.236 (MPG); Theodorus Studites, *Epistulae* 313.

## b. 惡態用語 (foul language)

i. アリストファネス『断片』fr.673a (Edmonds) (5-4cBCE)<sup>27</sup>

「私が何をすべきか教えてください、あなたにとって私は投げられるサイコロなので  
すから／彼は言う、『滅んでしまえ、katharma よ、お前は我々の前から消えていなく

26 Demosthenes, *In Midiam*: S.H. Butcher, *Demosthenis orationes* (vol. 2.1; Oxford: Clarendon Press, 1907).

27 J.M. Edmonds, *The fragments of Attic comedy* (vol. 1. Leiden: Brill, 1957).

ならないのか (οὐ φθερεῖ καθαρχμα, εἶπε, κακποδῶν ἡμῖν ἄπει;)』。」

Edmond はこれを *Go and be hanged for a scapegoat, can't you* と訳し、解説として以下のとおりに記す。Suida Lexicon: καθαρχμα・expiatory offering, scapegoat (or more properly 'scape-man') (p.757). しかしこの訳は 10cCE の解釈を 1500 年前のテキストに持ち込んでおり、やや読み込みすぎではなかろうか。同様に読み込みすぎた訳として、Lucianus, *De mercede conductis potentium familiaribus* 24 を参照 (Loeb vol.III)。

## ii. 『イソップの生涯』 p.234 (1cCE)<sup>28</sup>

「彼 (商売人) はふり返ると、『しっし、あっちに行け、なんとも汚らしい犬よ (ἄπιθι ... ἀπ' ἐμοῦ, ῥυπαρώτατε κύον)』と言った。イソップが『教えてください、何のためにいらっしゃいましたか』と言うと、その商人は言った。『katharma よ (κάθαρχμα)、いくらか商品を買いに来たのだ。』」

悪態用語が顕著なのは、とくに *Vitae Aesopi* と *Philastratus, Vita Apollonii* であろう。ここでは a.i. の延長で、「くず野郎」、「ろくでなし」等が適当であろうか。κάθαρχμα と犬が併用される例としては、*Joannes Chrysostomus, Ad populum Antiochenum (homiliae 1-21)* 49.173, *Georgius Monachus, Chronicon (lib. 1-4)* p.582 をも参照。

## iii. その他のテキスト

Aristophanes, *Plutus* 454, *Franmenta (Demianczuk)* 59.1; Menander, *Samia* 481; *Vitae Aesopi: Vita G* 29, 31, 69, *Vita W* 14, 31, 77b, *Vita Pl vel Accursiana* 234, 237, 246; Lucianus, *Dialogi mortuorum* 6.2, 20.9, *Symposium* 2.16; Demonax, *Fragmenta* fr.35; Athenaeus, *Deipnosophistae* 15.54; Dio Cassius, *Historiae Romanae* 72.15.5; Flavius Philostratus, *Vita Apollonii* 1.12, 4.30, 5.7, 5.23, 5.29; Didymus Caecus, *Commentarii in Ecclesiasten* (7-8.8) p. 205; Libanius, *Declamationes 1-51* 30.1; *Philogelos (Philogelos sive Facetiae)* 56, 58, 68, 100, 128, 193; Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 12.48.

## c. 自己卑下

軽蔑語を自らに向ける「自己卑下」は 1 コリント書 4 章 13 節の引用においてのみ見られる。したがってこのよう方はパウロの影響によるものと考えられる。

28 *Vitae Aesopi (Vita Pl vel Accursiana)*: A. Eberhard, *Fabulae romanenses Graece conscriptae* (vol. 1; Leipzig: Teubner, 1872).



## i. ΠΕΡΙΨΗΜΑ との併用

Origenes, *Homiliae in Job* 17.69; Joannes Chrysostomus, *Ad Demetrium de compunctione* (lib. 1) 47.405; Theodoretus, *Explanation in Canticum canticorum* 81.208; Maximus Confessor, *Liber asceticus* 15; Antiochus Monachus, *Pandecta scripturae sacrae* 40.

## ii. その他

Pseudo-Macarius, *Epistula magna* 278.

## 2. 不用でろくでもないもの（考え）

a. ヨアンネス・クリュソストモス『*Ad eos qui scandalizati sunt*』22.4 (4-5cCE)<sup>29</sup>

「私にその馬鹿馬鹿しい katharma を語らないでくれ、その贅沢で心底肉的で、なんとも無益なことどもを (μη γὰρ μοι τὰ καθάρματα τῶν ἀνοήτων εἴπης, τοὺς βλάκας καὶ αὐτόσαρκας ὄντας καὶ φύλλον κουφοτέρους)。」

## b. その他

Demosthenes, *De corona* 128; Theophrastus, *Fragmenta* 174.2; Lucianus, *Dialogi mortuorum* 3.1; Julius Pollux, *Onomasticon* 5.163; Marcus Aurelius Antoninus, *Tὰ εἰς ἑαυτόν* 12.2.1; Flavius Claudius Julianus, *Ἀθηναίων τῇ βουλῇ καὶ τῷ δήμῳ* 5; Libanius, *Orationes* 1-64 3.6, 33.15; Joannes Stobaeus, *Anthologium* 5.1.9; *Martyrium Juliani et Basilissae* (*Martyrium sanctorum Juliani et Basilissae*) 2.44.

## C. 追放儀礼との関連で考慮すべきテキスト

## 1. アテナイにおける子豚の血による浄め

a. アリストファネス『*アカルナイの人々*』44 (5-4cBCE)<sup>30</sup>

「プリュタネイス（の元老）の人々が昼の最中にやって来ました。私の言っていたとおりです。どうぞ前の方まで、近くまで来て下さい、katharma の内側まで (πάρσι' εἰς τὸ πρόσθεν, πάρσιθ', ὥς ἂν ἐντὸς ᾗτε τοῦ καθάρματος)。」

注解者はこの καθάρμα に関して、「集会の直前にプリュタネイスのメンバーの席は、浄めのために屠殺された豚の血がふりかけられる。これはケレス神に対する犠牲である<sup>31</sup>。」それならば、「カサルマの内側」とは、「浄められた席」を意味するか。次に挙げるヘシキオスの定義はこの慣例を反映しているだろうか。

29 Anne Marie Malingrey, *Jean Chrysostome. Sur la providence de Dieu* (Paris: Éditions du Cerf, 1961).

30 Aristophanes, *Acharnenses*: N.G. Wilson, *Aristophanis Fabulae* (OUP, 2007). アリストファネス『アカルナイの人々』村川堅太郎訳、岩波書店、1951年。

31 Aristophanes, *The Eleven Comedies* (New York: Liveright, 1932).

b. ヘシュキオス『レキシコン (A-O)』κ 88 (5-6cCE)<sup>32</sup>

「katharma：子豚。これ（豚の血）を酸いぶどう酒に混ぜて祭壇を浄める（κάθαρμα・τὸ χοιρίδιον, ὃ τὴν ἐστίαν ἐκάθαιρον ἐν ταῖς ἐκτροπαίαις）。おおよけの豚犠牲が（このように）呼ばれた。」

2. アッティカ地方における三叉路に供える犠牲

ハルポクラティオン『弁論家辞典』p.224 (1-2cCE)<sup>33</sup>= フォティオス『レキシコン (E-Ω)』ο 340

「オクススミア：…アリストアルコスや他の人々によると、オクススミアは人を磔にする木を指す。（この犠牲者は）カタバミの枝で怒りをもって打たれる（ἀπὸ τοῦ ὀξέως τῷ θυμῷ χρῆσθαι）。これらの木は切り倒された後、持ち出されて燃やされる（ταῦτα δ' ἐκκόπτοντες ἐξορίζουσι καὶ καίουσι）。アンティクリデスのディディマスはその注解書の一文において、katharma や汚れた物がオクススミアと呼ばれる、と述べている（ὀξυθύμια τὰ καθάρματα λέγεται καὶ ἀπολύματα）。家々が浄められた後で、これらは三叉路へ運び出されるからである。三叉路に置かれた物に関してディディマスは以下のように注解する。それは、人々が浄めの供え物を持ち込んだヘカテ像である（Ἐκαταῖα, ὅπου τὰ καθάρσια ἔφερόν τινες）。この供え物はオクススミアと呼ばれる。」

三叉路に供えられる κάθαρμα に関しては、同時代の Pollux も短く言及している (Julius Pollux, *Onomasticon* 5.163)。上述のアテナイにおける追放儀礼の描写とはおおよそ似ていない。またこの説明の場合、放逐されるのは木であって人ではないし、厳密には追放儀礼と異なるヘカテ神への献げ物となっている。

3. ΚΑΘΑΡΜΑ と ΦΑΡΜΑΚΟΣ

a. ハリカルナッソスのディオニュシオス『Ἀττικὰ ὀνόματα』φ 2 (2cCE, Halicarnasseus)<sup>34</sup>= フォティオス『レキシコン (E - Ω)』φ 640

「ファルマコス：価値のない物の katharma。イオニア人が（領地を）広げていた頃『ファルマコス』と言った（οἱ δὲ Ἴωνες ἐκτείνοντες λέγουσι φαρμακόν）。彼らがバルバロイたちの居留による汚れから母語、境界線、（特定の）日々を浄めていたからである（οὗτοι γὰρ διὰ τὴν τῶν βαρβάρων παροίκησιν ἐλυμήναντο τῆς διαλέκτου τὸ πάτριον, τὰ μέτρα, τοὺς χρόνους）。ヒッポナクスもこのことを明言している。」

上述のイオニア地方における追放儀礼を想起させなくもないが、ここでは異文

32 K. Latte, *Hesychii Alexandrini lexicon* (vols.1; Copenhagen: Munksgaard, 1953).

33 W. Dindorf, *Harpocratonis lexicon in decem oratores Atticos* (vol. 1; OUP, 1853).

34 H. Erbse, *Untersuchungen zu den attizistischen Lexika* (Berlin: Akademie Verlag, 1950).

化を持ち込むバルバロイを「ファルマコス」(すなわちゴミ)と呼んでその影響を警戒したということだろうか。このテキストから、ファルマコスと併用されているからといって、κάθαρμαが追放儀礼を示唆する語とは言えない。示唆する語と説明語とは異なる。

#### b. 「アリストファネスへのスコリア」v.454b (12cCE)<sup>35</sup>

「ファルマコスと癒やしのために町々の犠牲として献げられる者たちは『katharma』と呼ばれ、このようにしてこれが犠牲となった (οἱ φαρμακοὶ δὲ καὶ πρὸς θεραπείαν θυόμενοι πόλεων ἐκαλοῦντο καθάρματα. οὕτω δὲ ἡ τοιαύτη θυσία ἐγίνετο)。災難の恐れが町に降りかかると、彼らはもっとも醜い者か身寄りのない者かを捕らえて、乾燥イチジクと大麦菓子とチーズとを手ずから与えた。海藻や野イチジクの枝で急所を7度打ち、市場の真ん中で野生で実のつかない木の下で火をおこし、この男を全焼の生け贄として捧げた (τοῦτον ὀλοκαυτώσαντες)。そしてその灰を、魔除けの目的で、町の周り全体にまき散らした (τὴν τέφραν εἰς ἀποτρόπαιον πάσῃ τῇ πόλει περιερράντιζον)。」

ツェツェスが『キリアデス』でヒッポナクスによる追放儀礼の描写を編集して伝えた内容が反映されている。12世紀にはκάθαρμαが追放儀礼と結びつけられていたことを示すかも知れない。原始教会以降4世紀までのキリスト教資料においてφαρμακόςが用いられる様子を分析したが、そのすべてが「魔術者」という意味でのφαρμακόςであり、追放儀礼の被害者としてのφαρμακόςは1度も用いられていない。「魔除け」という意味でのἀποτρόπαιοςとその同語根語(ἀποτροπή, ἀποτροπία, ἀποτροπιάζω, ἀποτροπιάσμα, ἀποτροπιασμός, ἀποτροπιαστής, ἀποτροπιαστικός, ἀπότροπος)が追放儀礼の説明において登場するのはこの1箇所だけである。ちなみに、他の代表的な魔除け慣習であるβασκανίαがἀποτροπ-語とともに用いられるケースは多く、たとえばJohn Chrysostom, *Homilies in Matthew* vol.57, p.404 (MPG); Aristaenetos, *Epistulae* book 1, letter 1を参照。

## IV. 追放儀礼とイエスの死の説明

### A. 『1クレメンス』49-55章

クレメンスは愛の実践を勧める中でキリストが我々への愛ゆえに血を流されたと述べ

35 *Scholia in Aristophanem* (*Commentarium in Plutum*; scholia recentiora Tzetze): L. Massa Positano, *Jo. Tzetzae commentarii in Aristophanem* (Groningen: Bouma, 1960).

る (49.6)。ダビデの詩編を引用しつつ、神が犠牲よりも信仰告白と愛を求めると教える (52.1-4)。偶像礼拝に耽る民に対する神の怒りを鎮めるために、モーセは自らの命を賭して執り成しをする (53.2-5)。「異邦人の例も挙げましょう。疫病が蔓延すると、王や支配者の多くが何かの託宣に導かれ、自らを死に引き渡したが、それは己の血によって臣民を救うためでした。多くの者が、これ以上だれも謀反を起こさないようにと自国を離れたのです (πολλοὶ βασιλεῖς καὶ ἡγούμενοι, λοιμικοῦ τινὸς ἐνστάντος καιροῦ, κρησμοδοτηθέντες παρέδωκαν ἑαυτοὺς εἰς θάνατον, ἵνα ῥύσωνται διὰ τοῦ ἑαυτῶν αἵματος τοὺς πολίτας. πολλοὶ ἐξεχώρησαν ἰδίων πόλεων, ἵνα μὴ στασιάζωσιν ἐπὶ πλεῖον)」(55.1)。「私たちのうちには、自らすすんで牢に入り他の人々を贖う者 (παραδεδωκότας ἑαυτοὺς εἰς δέσμα, ὅπως ἑτέρους λυτρώσονται) がいることを私たちは知っています」(55.2)。ユディトやエステルも民の救いのために命がけの行動に出る (55.5-6)。

これは英雄死の例とも考えられようが、それが追放儀礼の起源神話となっていることは考えられる。とくに後述するオリゲネス『ヨハネ福音書注解』においてこれが追放儀礼と結びつく点は看過しがたい。本書がコリント教会へ送られているにもかかわらず、この文脈において1コリ 4.13の περικάθαρμαと μερίψημα に言及しない点は注目に値する。

## B. オリゲネス『ヨハネ福音書注解』6章54章(2-3cCE)<sup>36</sup>

殉教という大きな主題を扱いつつ、犠牲によって赦しや浄めが成立することの残酷さを認めながら、最終的にそれは神の計らいであって、未熟な者はこの憂いによって道を逸らすのだと結ぶ。そのような一見して不条理な体験の例として、「異邦人のあいだでも見られることだが、疫病が蔓延すると同胞のために多くの人々が自らを犠牲として差し出した (πολλοὶ τινες, λοιμικῶν ἐνσκηψάντων νοσημάτων, ἑαυτοὺς σφάγια ὑπὲρ τοῦ κοινού παραδεδώκασιν)。これらの逸話を根拠のないことではなからうと信頼し、忠実なクレメンスは然もありなんと受け入れた」と述べる。

おそらくクレメンスへの言及は上記の1クレメンス55章1節であろう。ここまでの段階ではイエスの死と追放儀礼が結びつけられていないようだが、後続する56章(後述)では「神の仔羊」と結びけられる。

36 Origenes, *Commentarii in evangelium Joannis* : C. Blanc, *Origène, Commentaire sur saint Jean* (5 vols.; *Sources chrétiennes*; Paris: Éditions du Cerf, 1966-92).

C. オリゲネス『ケルソス駁論』1 卷 31 章<sup>37</sup>

「イエスの弟子たちは預言者の言葉によってこの方が預言された方であるあえて示したのみならず、他の民族に対しても、近年十字架に架けられた方が人類のための死を甘受したことが、ちょうど蔓延る疫病や飢饉や航海の難を鎮め去る目的で祖国のために死ぬ人たちと似ていることを示したのです (ἀνάλογον τοῖς ἀποθανοῦσιν ὑπὲρ τῶν πατρίδων ἐπὶ τῷ σβέσαι λοιμικὰ κρατήσαντα καταστήματα ἢ ἀφορίας ἢ δυσπλοΐας)。…ですから、イエスが人類のために十字架というかたちで死んだことを信じようとししない人たちは答えなければなりません。(自分の) 町や民族に襲いかかる悪を押しとどめる目的で共同体のために死ぬ人たちに関するギリシア人や野蛮人が語る多くの逸話を彼らは受け入れないのでしょうか (οὐδὲ τὰς ἑλληνικὰς παραδέξονται καὶ βαρβαρικὰς πολλὰς ἱστορίας περὶ τοῦ τινος ὑπὲρ τοῦ κοινοῦ τεθνηκέναι καθαιρετικῶς τῶν προκαταλαβόντων τὰς πόλεις καὶ τὰ ἔθνη κακῶν)。」

省略した部分に、オリゲネスの山羊追放に関する理解と重なるところがある。しかし彼は、この追放儀礼のメタファと山羊追放とを一緒に語ることをしない。

37 Origenes, *Contra Celsum*: M. Borret, *Origène. Contre Celse* (4 vols.; *Sources chrétiennes*; Paris: Éditions du Cerf, 1967-69). オリゲネス『ケルソス駁論 (1)』出村みや子訳、教文館、1987 年。